



小学生の時は、登校するとすぐに家で書いてきた手紙を友だちに渡しに行ったり、交換日記をしたり。

しかし、手渡しで友人と手紙を交換できるのも高校まで。高校卒業後は、一人の友人と文通を始めた。

もちろん、その時代はもう携帯電話も普及していたので、メールという連絡手段もあった。

が、それでも私たちは、たわいもない話の時は手紙を使ってやり取りした。メールは急ぎの用件の時のみの使用だ。

手紙は、まず相手がいないと始まらない。そこから、文字を書くためのペン、紙、封筒、シール、切手を準備することとなる。そして肝心なのが、「時間」と「気合い」を準備すること。

どう考えても、スマートフォン一つで気軽に行なえるメールラインとは大違いの手間だ。

でも、手紙はいいと思う。なぜなら、日々過ぎていく生活の中で、手紙ほど自分と他者に向き合う瞬間はないと思うからである。

手紙を書くことで、自分を振り返り、想いを整理し、さらに相手と自分の関係性を考える。言葉遣いを気にしたり、いつもより丁寧な字を書いたり、適当な字で許されたり。

相手にとっての自分を見つめ——
自分にとっての相手を見つめ——。

手紙には、「自分の想い」や「相手への想い」のどちらか一つではなく、自分と相手と向き合うという双方向の想いに出会う瞬間が潜んでいるように思う。

足早に過ぎてゆく時の中で、手紙を書く時間が、新たな自分と向き合う貴重なひと時になるのではないだろうか。

あなたも、誰かのことを想い、自分自身とそんな時間を紡ぎませんか？

私は今日も手紙を書くと思います。

二〇一五年二月 やまさきささちよ

みのまわり

③